

聖書日課 『からし種』 2025.2.23-3.2

<p>2月23日 (日) マタイ 11章</p>	<p>「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました」(25節)。地上で最も偉大な者が小さな者とされる「天の国」(11節)はいったいどのようなところなのか想像がつかないけれど、「幼子や疲れた者、重荷を負う者が神をほめたたえるところだよ」という主イエスの言葉にうれしくなる。</p>
<p>24日 (月) マタイ 12章</p>	<p>「(汚れた霊が)戻ってみると、空き家になっており、掃除をして、整えられていた」(44節)。家の中を掃除をしたらダメなのだろうか。そうではない。「汚れた霊」(=人を神の愛から引き離す働き)を遠ざけていただいたのに、家を「空き家」のままにしていることが問題なのだ。「愛なる神」を家の「主人」として迎え入れる新しい歩みを今日から始めることができるように。</p>
<p>25日 (火) マタイ 13章</p>	<p>「しかし、あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ」(16節)。わたしの目は「人となられた神」をしっかりと見ることができているだろうか。わたしの耳は「最後まで愛し抜いてくださる方」の語りかけを聴くことができているだろうか。第一のものを、第二ではなく第一にする。まず「わたしのこと」を優先しがちな順番に気をつけたい。</p>
<p>26日 (水) マタイ 14章</p>	<p>「(イエスは)群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった」(23節)。マタイ14章には「ひとり」という言葉が三度出てくる。主イエスも「ひとり」になりたかったのだ。それほどまで「人々」と「弟子」のことをいつも優先された。しかし主イエスはご自身の力がどこから与えられるのかをご存じだった。父なる神の前に「ひとり」になる。ここに主の愛の源泉がある。</p>

聖書日課 『からし種』 2025.2.23-3.2

<p>27日 (木)</p> <p>マタイ 15章</p>	<p>「しかし、イエスは何もお答えにならなかった」(23節)。主イエスは どうしてここまで「カナンの女」に冷たいのか。何も答えないだけでなく、「子供たちのパンを子犬にやるのは…」と厳しい言葉さえぶつけている。ただ最後に彼女の信仰を心から称える姿を見ると、主は私たちの祈りを引き上げ鍛えるために「沈黙」や「障害」を用意されることがあるのかもしれない。</p>
<p>28日 (金)</p> <p>マタイ 16章</p>	<p>「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現わしたのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」(17節)。ガリラヤの海辺で主イエスに声をかけられた日、シモンの人生はまったく変えられた。人の幸いは、どんな能力を持ち合わせているかではない。天の父なる神の愛につながられて、主イエスと共に歩むことにある。この幸いにまさるものはない。</p>
<p>3月1日 (土)</p> <p>マタイ 17章</p>	<p>「もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる」(20節)。「からし種一粒の信仰」とはどのような信仰だろうか。真実の愛の神を前に自らの力の小ささをとことん知っている信仰か。「あなたがたにできないことは何もない！」と語られる主は、わたしの裏も表もすべて知り尽くしておられる方。</p>
<p>2日 (日)</p> <p>マタイ 18章</p>	<p>「イエスは言われた。『あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい』(22節)。七の七十倍とは、無限に赦すこと。それは主なる神の愛による赦しにほかならない。「わたしたちも自分に負い目のある人を／赦しましたように」(6章12節)と祈る時、心から赦すことのできない自分を知らされ、改めて主の示される愛の赦しの大きさに気づかされる。</p>